労働の脱標準化および貧困とワーク・ファミリー・コンフリクト
―社会の液状化と家族生活―

日本福祉大学
末盛　慶

1　目的

社会学の理論的な議論として、社会の液状化が指摘されて久しい（バウマン 2001）。現実の社会に目を向けると、労働の安定性はより不安定なものとなり、生活保護を受給する世帯も増加を続けている。

一方、共働き世帯の増加や女性の二重負担の問題を背景に、ワーク・ファミリー・コンフリクト（以下 WFC）に関する研究が国内外で行われてきた。しかし、先行研究は社会心理学的な視点に基づくことが多く、分析としては本人の役割に付随する諸変数と WFC の関連を検討するものが多い。上述した後期近代の特徴とされるような社会的文脈と WFC がどう関連しうるのかを検討する研究は少ない。

そこで本研究では、後期近代の社会的特徴の中でも、労働の脱標準化と貧困の２つを取り上げ、この両者が母親の WFC とどのような関連を見せるのかを計量的に明らかにすることを目的とする。

2　方法

調査対象は、中部地方の A 大学に通う学生の母親である。抽出方法は有意抽出法となる。配布方法は調査実施者および協力者の講義の受講生を経由して、その受講生の母親に手渡しあるいは郵送で調査票を送付した。回収は郵送法で行った。回収数は 290 票であった。性別あるいは年齢が無回答のもの、61 歳以上の者をはずし、就業している母親に分析対象を絞った。分析対象数は 245 名である。

3　結果

母親のWFCを従属変数とした一般線型モデルを行った。本報告では、労働の脱標準化として、労働のスケジュールの脱標準化を検討した。分析の結果、母親の土日出勤が毎週、隔週となっている高位群の方が低位群に比べ母親のWFCが高くなることが示された。夜間勤務とWFCの関連については、夜間勤務を経験している母親はそうでないものに比べ、WFCが高い傾向がみられた。

世帯の貧困状況に関しても、母親のWFCと有意な関連が見られた。結果は、過去1年間の間に必要な食糧あるいは衣料を買えない経験がない人に比べ、ある人の方が母親のWFCが有意に高かった。

4　結論

結論としては大きく 2 点ある。１点目は、母親の労働の脱標準化と本人の WFC との間に有意な関連が見られたことである。具体的には、土日出勤の頻度が増すほど、夜間勤務が多いほど、母親の WFC が上昇する傾向がみられた。つまり、土日出勤や夜間勤務のようなイレギュラーな労働が増えるほど、母親の WFC は上昇すると言える。労働の脱標準化と家族生活の関連に関しては、否定的な影響を主張するものとむしろ両領域の両立を助けるという２つの相反する見解が存在するが、今回の分析においては後者の主張は支持されず、脱標準的な働き方は働く側にとって負担となりうることが示された。

2 点目は世帯の貧困状況と母親の WFC の関連である。今回の分析の結果、世帯の貧困状況が深刻であるほど、母親の WFC は有意に高まることが示された。結果の解釈としては、世帯の貧困状況が厳しいほど、母親は就業することを余儀なくされ、かつ厳しい労働環境であってもその状況に耐えて働かざるをえないため、母親の WFC が高まるものと考えられる。

今後の課題としては、①父親の WFC の検討、②労働の脱標準化に関する他の尺度の検討、②データの量的および質的改善があげられる。

文献

ジグムント・バウマン.2001.『リキッド・モダニティ―液状化する社会』大月書店.